

## 第1部 「名所『鳴門の渦潮』の成立」の概要

金田 章裕

第1部には、名所「鳴門の渦潮」の成立過程とその前史についての4報告を収載した。

1. 「原始・古代・中世の鳴門海峡」（福家清司）ではまず、鳴門海峡海底から発見された旧石器や化石骨などから、それらは旧石器時代人の活動痕跡と推定されている。縄文土器の確認例も多いが、弥生時代には遺跡数は飛躍的に増え、鳴門側では製塩土器が、淡路では銅鐸・銅剣などの青銅器の検出が特徴的であるとされている。鳴門海峡の両岸には古墳が数多く分布し、特に鳴門市側には小規模な古墳が多く、漁労に従事した海人集団に関わると推定されており、ほかに製塩遺跡も検出されている。淡路島側でも、須恵器のほか鉄製釣り針、軽石製浮子、土錘などの漁具の検出が報告されている。

律令制下では、南海道の官道が淡路国福良から阿波国撫養へとまさしく鳴門海峡上に設定されていた。また平城宮跡から出土した木簡（8世紀）に、「阿波国 板野郡牟屋海」から「若海藻」（ワカメ）が、「淡路国三原郡」から「調塩」が貢納された際の荷札木簡が含まれていることが報告されている。

中世の仁治4年（1243）、高野山僧道範は讃岐国に配流されるに際し、淡路福良から「阿波の戸」を渡って「佐井田」（斎田）に至っており、まさしく古代以来の官道を辿ったことになる。「兵庫北関入船納帳」では、文安2年（1445）に阿波「武屋（撫養）・土佐泊」、淡路「あなか」等のいずれも港津名が見えて、「小麦・大麦・米・藍・阿波塩・三原（塩）」などを運んだことが知られる。室町時代には、水軍領主の安宅氏が淡路国由良を拠点としており、細川氏水軍としても活動していたとみられている。

また、明応2年（1493）の聖護院門跡の渡海には鳴門海峡のルートが避けられていたことも知られるが、天正13年（1585）の豊臣秀吉軍の四国出兵は、淡路から鳴門海峡を渡海して土佐泊城に入るものであった。

2. 「古典文学に描かれる『鳴門の渦潮』」（小島明子）では、『万葉集』に登場する「奈流門能宇頭之保」（鳴門の渦潮）が周防大島の鳴門であることをまず確認し、平安時代の歌集に見られる「なると」にも、この大島の鳴門が多いことを述べている。

ところが保安2年（1121）の俊頼の歌をはじめとして、「阿波の鳴門」と確認できる例が出現し始めることが確認されている。『歌枕名寄』に10首の阿波の鳴門の例が取り上げられていて、中程度に知られた歌枕となっていたこともこの状況を反映しているとみられている。

散文では『日本書紀』に「粟門」（阿波のと）と「速吸名門」（はやすいなど）が並列して出現し、承平4年（934）に鳴門海峡を渡海した紀貫之の『土佐日記』にも「阿

波の水門（みなと）」と見えるが、いずれも渦への言及はない。『平家物語』では伝本によって違いが大きい、「阿波の鳴戸」の表現はみられる。

ところが『太平記』になると「阿波の鳴渡」の情景が、例えば「雲珠（うず）の巻くに随つて、浪とともに舟の回ること、茶臼を推すよりも速やかなり」などと具体的に描写されている。以後、「鳴門の渦潮」の記述例が多く、中でも天明2年（1781）加藤景範『観濤記』はきわめて写實的に光景を活写していることが指摘されている。つまり、中世以前は観念的な描写が多かったのに対し、近世になると写實的な描写が出現するという一般的傾向が、確認されているのである。

3. 「江戸時代絵画に描かれた鳴門海峡」（大久保純一）もまた、類似の動向を確認している。江戸時代後期画壇において伝統的な「山水画」から近代的な「風景画」へと展開する動向の中で、一種の「風景趣味」が台頭して「真景図」と称される写實的な実景写生が出現したことを述べている。

徳島藩に取り立てられた鈴木芙蓉（1752－1816）の「鳴門十二勝真景図巻」や、やはり徳島藩絵師の守住貫魚（1809－92）「鳴門真景図」などが鳴門についての典型例であり、淵上旭江『山水奇観』（1802年）中の鳴門の2図などはそれらの構図を踏襲しているとみられるとする。さらに、観念的な渦潮を描いた葛飾北斎の「阿波の鳴門」（文化14年（1817）刊）もある。

大きな画期は、歌川広重の「六十余州名所図会 阿波鳴門之風波」（嘉永6－安政3年（1853－1856）刊）や有名な「阿波鳴門之風景」（安政4年（1857）刊）である。いずれも『山水奇観』に拠っているものの傑作であり、以後大きな影響をもたらしたことが説明されている。2代目広重もまた、同様に『山水奇観』の影響を受けて「鳴門の渦潮」を描いている。

一方、エンゲルベルト・ケンペルは元禄3年（1690）から5年間、医師として日本に滞在したが、彼の『日本誌』には阿波の鳴門の「渦巻き」について記している。さらに、文政6年（1823）から12年間、日本に滞在したフランツ・フォン・シーボルト『日本』には、鳴門の「泡立つ流れ」と「激しい波」が記録され、優れた挿図も加えられていることが報告されている。

4. 「古地図・絵図にみる『鳴門の渦潮』（平井松午）は、古地図における表現を整理して、「四国古図」が「鳴門の渦潮」を描く最古の絵図であるとする。

同図を、寛永10年（1633）の寛永巡検使上納国絵図である阿波国・淡路国の国絵図を基礎としたものと推定し、慶長国絵図における「鳴渡」という地名および潮流だけの表現とは異なって、渦の表現が描かれていることに注目している。

阿波国・淡路国については正保国絵図のほかに、その再提出図である寛文5年（1665）こ

ろの「阿波淡路両国絵図」が存在し、それには「鳴門」海峡の距離・潮流・水深・瀬などについて詳細な説明が書き加えられている。その中に、「満干共に潮早く波高うつまき（渦巻き）大に海荒」と説明されていることが指摘されている。

さらにいくつかの「大鳴門」の表現がある例では、同時に「小鳴門」の記入があるものの、その位置が必ずしも一定していないことも報告されている。

（「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会委員長）